



# 幼児に対するおはなし

— 幼児教育の

立場から —

本 田 和 子

幼稚園関係者のある研究グループが、テーマとして「幼児と成人の間のことばによるコミュニケーションの研究」を選んだ。簡単な

手続きで行なえる実験をくり返した結果、純粹に音声言語だけで行なう伝達が幼児にとってかなり困難の多いものであること、特に年少児は音声言語だけで伝えられる事柄を、正しく把握して行為に移すことができにくく、視覚的影像を併用するとその把握度が著しく高まること、などが明らかとなった。

ところで、同じグループが翌年「言語教材の用いられ方」に関する実態調査を行なった。すると、幼稚園で最もよく用いられている

言語教材は、「お話」であるという結果がみられた。

「お話」は純粹にことばだけを媒介とした行為である。もちろん、その表現の過程において、簡単なゼスチュアが入ったり補助材料が使われたりすることはあっても、本質的には言語によって行なわれる伝達行為である。

とすれば、保育の現場では幼児にとってその受容が困難であるにもかかわらず、言語を媒介とした伝達行為が、「お話」という形で非常にしばしば行なわれているということになるであろう。

教材として「お話」が極めて多く用いられるのは、その手軽さにもよるであろう。特別の道具や大がかりな準備も不要であり、どんな場面にも容易に挿入できるということ、幼児に通用する言語の所有者でさえあれば、誰にでも扱い得る教材であること、これらが

「お話」の使用度を高めている有力な原因と考えられる。しかし、この手軽さの故に、教材としての「お話」は多くの問題をはらんでいるといえよう。「お話」の与え方を考えようとするなら、先ずこの問題を捉えるところからスタートせねばならない。

## (一) 問題の所在 ☆☆☆

保育の現場で、「お話」がとり扱われる場合を整理して考えると、次のような分類がなされ得る。

- ① あることがらを説明するための「お話」。この中には、一日のスケジュール・行事の説明・生活指導・その他ことばによる伝達を必要とすることがすべて含まれる。
  - ② 言語指導の内容として扱われる「お話」。ことばによって組み立てられた材料を用いて、言語生活を豊かにし、ことばに対する感受性を養い、聞く力を高める、など。
  - ③ 幼児達を暫く静かにまとめておくための手段として用いる。
  - ④ 活動と活動の間の、時間のつなぎに用いられる。
  - ⑤ 幼児の要求にこたえてなされる。
  - ⑥ 文化財としての「童話」の役割を考え、よい作品にふれさせることによって文学への興味を育てようと思図してなされる。
- 以上の中で、最も多くみられるのは、①及び②であろう。

すなわち、「お話」はある目的に仕えるための道具として用いられているのであり、その目的は極めて実地的なものである。

あることがらの伝達のためにのみことばが用いられる場合、特にその「つたえ」が対象にある行為をひき起こさせようとする内容をもつものであれば、用いられることばの妥当性は、要求される内容がどの程度まで正しく行為として具体化され得たかということによって検証されるわけである。そのために、このような目的に仕える「お話」はできるだけわかりやすく、伝えねばならないことがらをくり返し強調して、全く巧利的に用いられがちであるし、また、そのような使用法が許されるわけである。

これらの使用方法はいずれも妥当なものであり、必要性をもつものである。しかし、問題は、使用のタイプが①及び②に偏りがちであること、特に⑥の用いられ方が極めて少ないという点にある。そして、また「童話」を言語文化財として考え「童話」「絵本」などに対する興味の芽生えを養おうと思図して「お話」がとり扱われる場合にも、その話材の選択・その扱いが、比較的無考えに終始しがちな点にも問題が見出だされるのである。

「お話」を他の目的に仕える道具としてのみ考えず、「お話」本来の価値においてとり扱う場合をいま少し多くすること、及び、その「お話」本来の価値について、保育者自身がもう一歩つつこんで考える機会をもつこと、これが私共に与えられた課題といえよう。

## (二) 文化財としての「お話」のとり扱い ☆☆☆

「お話」をことばによって組み立てられた文化財として考えようとするなら、その対象として浮かび上ってくるのは、当然「童話」とよばれる一連の物語であろう。但し、ここで用いる「童話」とは広い意味のものであって、古典・文芸童話・新しい作家達の創作品などを含んでいる。

わが国では「幼年童話」とよばれるジャンルがあつて、特に幼児を対象とした物語の創作に当る人達があり、そういう作品がある。しかし、幼児に与える童話の材料を、ここではいまま少し広く探してみようと思う。よい作品を「幼年向け」と限られた領域の固定した話材にのみ求めず、広くたずねる努力を惜しまないこと、これが第一の課題と思われるからである。

### (1) 話材の選択 §

ここでとり上げる話材の選択に当つては、次のことを考えた。つまり、幼年童話としてはあまり知られていず、従来は殆んどとり扱われていないものの中から作品を拾い出すことである。そして、一般によく知られているもの・代表的な童話として耳に親しいもの

は、当然保育の場で、妥当なとり扱いがなされているものと仮定して、触れずにすまずこととした。

### ① わが国の古典から

#### ◆「風土記」の作品

「出雲風土記」に次のような箇所がある。

——たこ島、めぐり一十八里一百歩、高さ三丈なり。古老の伝えてい  
えらく、出雲の郡、杵築の御崎にたこあり。天の羽々驚掠り持ちて、飛  
びひるがえり来て、此の島に止まりき。故、たこ島という。今の人、な  
お誤りてたこ島となすくるのみ。……

むかで島、めぐり五里一百三十歩、高さ二丈なり。古老の伝えてい  
えらく、たこ島にありしたこ、むかでを食い来て、此の島に止まりおり  
き。故、むかで島という。

「風土記」は風俗記・名勝記・名産名物記なども含めた人文地理的記述の地方誌と解される。土地の説明・地名の由来などにも素朴でのどかな古代人のユーモアがうかがわれて楽しいものが多い。引用した「たこ島」の部分なども、「たこがいたからたこ島、むかでがいたからむかで島」と、子ども達の命名にも似て微笑ましく読まれる。慌しくスピーディな現代の中で、こうしたのどかな感覚に触れさせることも意味深いのではなからうか。

#### ◆「堤中納言物語」より

「虫めずる姫君」は、この物語の代表的なものとしてよく選ばれた一篇であるが、蝶や花をいづくしむ普通の女性に対して、毛虫を愛しそれを採集してその変化を見守ることの好きな、当時としては極めて異常に思われた姫君を主人公とする物語である。しかし、容姿をつくることにも興味を示さず世の常の姫達の好むところを好まないこの女性を、著者の筆は愛情をもって描いており、その女主人公の個性はむしろ現代人のそれにも似て、興味深く思われる。幼児達の共感と同情をひく物語としてのとり扱いが可能であろう。

#### ◆「宇治拾遺物語」

「こぶとり」を始めとして「おとぎばなし」として語り伝えられている多くの説話がこの集に含まれている。その中から、次の二つをとり上げてみた。

「五色の鹿」は、利欲に目のくらんだ狩人が、命を助けられた恩を忘れてその鹿を捕えようとし、かえってその命を滅ぼすという、教訓臭の強いものであり、その出典は仏教説話に求められよう。しかし、童話としてのストーリー性を充分に備えているものとして、活用に値いすると思われる。

一方、「氷魚」のようなユーモラスな笑話が見出されるのは楽しいことである。珍しい氷魚（白魚のようなもの）のご馳走を、主人

の中座をねらって盗み食した客の鼻の穴からそれが飛び出し、主客共々大笑いするという物語である。とぼけた単純な短篇であるが、罪のない明かるさにみちている。

#### ◆「お伽草子」から

「お伽草子」は「鈴かつぎ」「物くさ太郎」「一寸法師」など子ども達の耳に親しい「おとぎばなし」の宝庫である。余り知られていないものの中に「のせ猿さうし」がある。

のせの山に権勢を誇る猿一族の息子が嫁選びをして、北白河の兎の美しい姫君に懸想し、狐がその仲立ちをして両者が結ばれるという、嫁とり説話であるが、その動物達がいかにも殊勝らしく振るまうところに、幼児達の興味をそそるものがある。

#### ◆民話・伝説からの取材

民話・伝説は本来「語りもの」として伝承されたものである。「語りもの」の強味は、言語だけを媒介として、対象の目の前にその情景をほうふつとさせるべき必要性をもつため、組まれる筋立ても物語の結構も、その線に添って作られている。したがって、「話す童話」として用いるにはよい条件を備えているといひ得よう。

※ 「風土記」「宇治拾遺物語」「堤中納言物語」「お伽草子」……岩波書店発行のものがある。評解書は、三省堂、有精堂などから出ている。

## ② わが国の現代作品

わが国の児童文学界は昨今、過去にない活況を呈しているときである。児童文学界にルネッサンスが到来したとさえいわれている。確かに、未明・広介の童話とはまた異なったフレッシュな作品が、次々と新しい人達によって産み出されている。これらの物語は、幼児よりもむしろいま少し年長の子ども達を対象にしたものが多い。しかし、これらは読まれる作品であると同時に語られる物語としての性格をもよく備えている。

文化財として「お話」を考え、言語文化に対する関心を育てようと思つて話材を選ぶ場合には、これらの新しい優れた作品の中から、幼児への話材を選ぶ努力をも怠つてはならないであろう。

最近の児童文学作品の多くは単行本形式で世に問われている。これは、童話の専門雑誌がなくなっていることに起因するのでもあるが、長篇童話が多く産まれていることを意味するであろう。したがって、幼児に与える場合は幾つかのまとまりに区切り、話す童話におきかえる必要が生じてくる。

例をあげて考えてみよう。

◆いぬいとみこ「木かげの家の小人たち」より

「ロビン、ふたりで『外』へいきましよう。おとうさまのふとんに入れるタンポポの綿毛をさがしましょうよ」アイリスはしのび足で一度棚へもどつて、手さげ袋をとつてきました。それは東京の森山家の外へ、ロビンがドングリをひろいにいったときの、肩からさげられるあの袋でした。ここの家のれんじ窓の下の外壁は、あらぬりの土壁でしたから、アイリスとロビンはローブをたよりに、ぶじに地面へおりてゆきました。

去年のくされ落葉のちりしいたら庭の土は、小さなアイリスたちの足の下でカサコソと音をたてました。アイリスとロビンはローブでむすびあつて、タンポポの綿毛をさがしてあるきました。けれども、いまは九月でした。タンポポの綿毛はもうとうに風に飛ばされてしまつたあのようなのでした。

ふたりは足音をしのばせて、すうとすずしいカラマツ林まで足をのばしました。あたりには小さな小さな小鳥の羽毛がふわりふわりと飛んでいました。

ロビンはじつと目をこらして林のかげをみつめました。木の枝ごしにもれてくる日ざしが、ちらちらゆれている地面の上で、小さなたつまきのような風がくるくるまい出しました。小さな小さな小鳥の羽毛がそのたつまきのあたりから、ふわふわまきあがっています。

「ふとんにつめるのは、羽毛だつていいね」ロビンは姉にささやいて、小さな風のうずまきにむかつて、びよんびよんとかけてゆきました。

アイリスが「ああっ」と、悲鳴をあげました。

姉にローブをぎゅっとひっぱられて、ロビンがぎゅうに立ちどまった

とき、ロビンはじつにへんなものと、じつと顔を見あって立っていました。

しばらくして、それは笑いだしました。木の枯れ葉がこすれ合うようなしゃがれ声で、それはロビンにいいました。

「おらのこと、へんなやつがでてきたと思ってるだな」ロビンはつばをのみこみました。「なんだ、口がきけるのかと思ってるだな」はだかの、日にやけた小さいものは、ゆかいそうに目をくりくりさせました。

「おまえ、おらの羽毛、とうろうと思ったな」それは、ロビンをじろろろみて、こわいかおになっていいました。アイリスがしずかに近づいてきました。アイリスはやさしく声をかけました。「こんちは、わたしはアイリスで、ここにいるのは弟のロビンよ」

小さなものは、すこし顔を赤くしました。そして、アイリスにいいました。

「おら、そんな、名まえないんだ。たぶんアマネジャキっていうんだべ。アマネジャックてよばれたこともあったかもしれないね。」アイリスとロビンは顔を見合わせました。

「なぜおらが、おまえらを見てびくくらしねえかと、おまえらは思っているんだな」アマネジャキはししゃがれた声でいいました。この小人は、こちらの思っていることを、ひょいひょいさきにいつてみるのが、とてもたのしいようすでした。

「そうよ、とても、ふしぎだわ」アイリスがまじめに答えました。

「なぜ、あんたびくくりしないのよ。わたしたちのような者を、前に見かけたことがあるの」

アマネジャキはそれをきくと、アイリスをじらすように笑いました。そして、ロビンとアイリスのまわりをたつまきのように踊りまわりました。——（112頁〜114頁）

これは森山家の子ども達と、彼らに養われているアイルランド系の小人（バルボー・ファーン・アイリス・ロビン）一家との物語であるが、この部分は、森山家の娘ゆりに連れられて戦時中に信州の山の中に疎開した小人達が、日本の小人アマネジャキと出合う件りである。殆んどこのままで、口調さえゆっくりとやさしくするならば、幼児向け童話として用いることができよう。188頁にわたる長篇をいくつかに区切って話すことは、幼児達の、聞いて把握する力を養う上からも効果的であろう。

#### ◆立原えりか「でかでか人どちびちび人」

——「ちびちび・るんは、ちゃんといののです。ほら、このこのなかです。」でかでか・ぶんはいつて、テーブルの上においてあった、ちいさなほこを、右手にのせました。木でつくった、花のようがほつてあるほこです。でかでか・ぶんは、右手を船長のほうへさししました。左手ではランプをとって、船長がよくみえるように、はこのなかをてらしました。

船長は、大きな声で、「あつ。」ときげびそうになるのを、ようやくがまんしました。ほんのりと黄色い、ランプのあかりにてらされて、ちいさいはこのなかにみえたのは、マッチばくらの大きな、ふとんでした。ふとんにうずまつて、ぐったりしたようすで目をつぶっているのは、ちいさいちいさい人間だったので。船長の前に立っているでかでか・ぶんとおなじように、はだはこげ茶色で、頭には、赤と青の羽かざりをつけています。

「これが、ちびちび・るんです。」でかでか・ぶんは、毛布からはみ出しているちびちび・るんの茶色いうでを、ひとさし指と親指でつまんで、そつと、毛布の中へ入れました。

「熱があるようだね。」船長は、小指の先で、ちびちび・るんのひたいにさわってみてからいきました。

「きぶんはどう、ちびちび・るん。」でかでか・ぶんはいいました。はこのなかで、目をあいたちびちび・るんは、さもなつかしそうに、両方の手を、でかでか・ぶんのほうへさしました。

「さあ、船長さんがみてくれるよ。このひと、なんでもわかるんだ。きつとすぐによくしてくれるよ。」でかでか・ぶんはいいて、はこを、船長にわたしました。

ちいさいなほこを、うけとつてはみましたが船長はこまつてしまいました。これまでにも、船長は、病人を診察したことがあります。お医者ではありませんが、船長は、病気のこと、ひととおり知っていたのです。

けれども、いくらなんでもわかる船長でも、こんなにちいさい人間のことは、どうしたらいいのか、けんどうがつきません。

それでも、いっしょうけんめいに船長をみつめていてでかでか・ぶんをみると、なんとかしないわけにはいきませんでした。

船長は大あわてで、上着のポケットにはいつているものをだして、テーブルの上にならべました。なにか、どれか役にたつものが、あるかもしれないと思つたのです。

双眼鏡や星図や、たたんだ地図や、万年筆がでてきました。手帳や、じしゃくや、たばこやパイプや、マッチがでてきました。けれども、そのどれも、役にたたないものばかりです。

「こまつたなあ。」首をかけたとき、船長の指は、ポケットの底にあつたものにさわりました。

「しめた。いいものがみつかったぞ。」船長は、ひとりごとをいいました。ポケットの底からでてきたものは、船長の手のつめぐらいの、虫めがねだったので。チューインガムのおまけについていたのです。おまけでも、レンズはすきとおつて、なんでも、すこしずつ、大きくみえました。

「これがあれば、だいじょうぶだ。ちびちび・るんに、口をあいてつて、いつておくれ。」

船長がいうと、でかでか・ぶんは、さつき、丸木船をこぎながらうたっていたときのような、やさしい声でいいました。「ちびちび・るん。せんちょうさんが口をあけて、みせておくれつて、いつてるよ。」

ちびちび・るんは、ふとんの中であんと口をあげました。船長は、ちいさな虫めがねでちびちび・るんののをみました。

「だいが、はれているね。熱もたかいようだ。肺炎かもしれない。どうしようかね。」船長はうでぐみをして考えこみました。でかか・ぶんもしんばいであまらないようすで、ぐったりと目をつぶっている、ちびちび・るんをみつめました。——(56頁〜60頁)

これも203頁ほどの長篇であるが、区切って話すことのできる部分が多く、楽しい物語である。引用部分の虫めがねで小人ののどをみる船長さんの姿など、どこかユーモラスで幼児達の興味をひこう。

紙数の都合で省略したが、この部分の童話としてのまどまりは、もう2頁ほど、つまり56頁〜62頁くらいを一区切りとした方がまどまりはよいようである。

幼年向きと銘打たれた短かい童話にも、もちろんよいものが多い。しかし、こうした小学生向きの作品を幼児化して、意欲的に保育界へ導き入れる試みも、幼児の世界をより豊かにする意味で望ましいことと思われる。

幼児はまだ文字を媒介として、自らの力で文化財たる童話に触れていくことのできない段階にある。したがって、媒介者となる成人、すなわち保育者の中間的伝え手としての役割りは極めて大きい。保育者は、幼児に対しては、よい作品を紹介するつとめがあり、作品に対しては、それを幼児達に正しく、しかも喜んで受けとらせるよ

うに配慮すべき責任を負っている。

私共の目を、「幼稚園で用いられているお話」の枠内に固定させることなく、広くよい作品に向けて、その中から幼児に伝えるべくよい話材を選び出す努力を怠ってはならない。

※ 「木かげの家の小人たち」 中央公論社。

「でかか人とちびちび人」講談社。

### ③ 海外の作品から

グリム・アンデルセンなど、いわゆる世界名作童話についてはふれる必要がないであろう。これらは世界にゆるぎない位置を占める古典として広く語られ、幼児の世界にも「お話」として、また「絵本」として常にとり入れられている。

むしろ、古典としては「ギリシャ神話」「カレクラ」「旧約聖書」などに目を向けてみてはどうであろうか。

現代の作品を選ぶに当たっても、わが国の場合と同じように、やや年長児向けのものをも対象とするとすれば、岩波少年文庫に収められている物語から数多くを選ぶことができよう。引用する余地がないため、作品名だけをあげてみよう。

◆サン・テグジュペリ「星の王子」(フランス)



◆ミルン「熊のプーさん」「プー横丁」(イギリス)

◆ノートン「床下の小人達」(イギリス)

◆「風にのつてきたメアリイホピンズ」(イギリス)

◆「とぶ船」(イギリス)

(いずれも岩波少年文庫)

これらは年長児向けのゆえもあって、充実に起伏に富んだストーリーをもった厚みのある作品が多い。この性格のゆえに、幼年童話の単調さ・淡泊さを補うよい話材となり得るであろう。

## § (2) 話材の使い方 §

選ばれた話材を活かして用いるにはどうしたらよいであろうか。

それは、その作品の性格と密接につながりをもつものである。言語文化財として、その本来の価値において用いられる童話は、その内容に最も適した与えられ方で扱われねばならない。

そして、その内容的な価値に対する判断は、保育者の作品に対する解釈に依存している。保育者達はよりよい作品に数多くふれることによって、児童文学に対するよいセンスを養っておく責任を、幼児に対して負っているのである。

内容によっては、視覚化して与えることもよいであろう。しかし、最近の幼児達はテレビの普及によって、人形劇その他の視覚的表現

を通して物語を受容する機会が極めて多くなっていることを考えるとき、むしろ、保育者がその音声言語だけを主体として、ことばの美しさをひびかせながら与える方法を重視したいと思う。

音声言語だけを用いての伝達は、先にも触れたように、幼児にとって受容困難な場合も少なくない。この問題をどう解決したらよいのか。自身の対象とする幼児達は、どの程度のことばの速度になれ、どの程度の把握力をもっているか、そしてどの程度に言語に対するセンスが育っているのか、これを確かめながら、対象の理解に合わせ、同時に対象の発達の次元において、最もよくその作品の美しさ・持ち味・訴えたいものを浸透させ得るような話し方を工夫すべきであろう。

いま一つ、私は、保育者一人ひとりの持ち味を重視したい。私共は各々異った個性をもち、そのタイプ・声・口調・ことばのひびきに、各々個人差を示している。民話型の大どかな味の出せるタイプ、抒情的な美しさにふさわしい声など、さまざまであろう。自身の持ち味をよく知って、それを活かすこと、これがその話材を活かす一つの方法になると思われるのである。

(尚絅女学院短期大学)

☆ ☆ ☆